

北海道標茶高等学校

課程： 全日制
 学科： 総合学科
 生徒数： 213名

1 取組の特徴

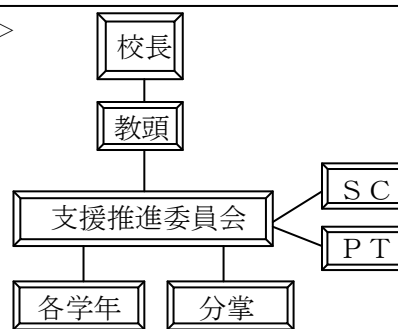
- (1) スクールカウンセラーとの連携による、個別の生徒の困り感への対応。
- (2) ピア・サポート活動や異年齢(校種)交流活動による、生徒のコミュニケーションスキルや自己肯定感の向上と良好な人間関係の構築。
- (3) 外部講師を活用した校内研修による、教員の教育相談活動に対する理解促進。
- (4) 「ほっと」や「Q-U」の活用による、きめ細かい生徒理解と生徒対応。

これらの取組を通して予防的・開発的教育相談を充実させ、不登校やいじめ未然防止を図る。

2 取組のねらい

本校は、生活面や学習面で問題を抱えたまま入学してくる生徒が多く、入学後学校に適応出来ず、不登校や別室登校を余儀なくされる場合がある。こうした課題を踏まえ、本事業を活用し、スクールカウンセラーの援助や指導を受け、自己肯定感を高める取り組みをし、コミュニケーションスキルの向上を図る。

<組織図>



3 取組の経過

4月

- ・入学前の中学校訪問による生徒情報収集と全職員による生徒の情報交換・共有
- ・宿泊研修時における仲間作り支援(1学年)

5月

- ・「ほっと」「QU」の実施(全学年)
- ・教育相談週間(全学年)

8月

- ・「ほっと」「QU」の実施(全学年)
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

9月

- ・教育相談週間(全学年)
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

- ・外部講師による生徒理解のための校内研修(「ほっと」の有効活用について)

11月

- ・スクールカウンセラーによる生徒理解のための校内研修(ピア・サポート理解について)

2月

- ・「ほっと」「QU」の実施(全学年)
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

3月

- ・教育相談週間(全学年)

5月～3月

- ・ピア・サポートトレーニング(全7回)

4 取組の内容

(1) スクールカウンセラーによる個別カウンセリング

- ア ねらい 生徒の不安や悩み、困り感を解消し安心して学校生活を送れるよう支援する。
- イ 対象 希望生徒及び指定生徒
- ウ 内容
 - ・生徒へのカウンセリング及び助言
 - ・生徒へのカウンセリングの結果に関わる教員への助言
- エ 成果 生徒はSCに悩みを聞いてもらうことを通して自己理解を深めることが出来た。また、教員は、生徒理解を深めると共に、課題に対しての支援方法や対応策について助言を受けることが出来た。

4 取組の内容

(2) ピア・サポート活動

ア ねらい 様々な支援スキル演習を通して、互いに思いやる気持ちを持ち、それを実践する雰囲気を作りだし、豊かな人間関係を構築できるようにする。

イ 対象 希望生徒（約16名）

ウ 内容 SCの遊佐賢子氏の協力のもと、放課後、ピア・サポートトレーニングを実施。

エ 成果 生徒の振り返りシートから、「何度かこの活動に参加し改めてピア・サポートは大切だし素敵な活動と思えるようになった。困っている人などに優しく接し仲良く話しが出来るようになった。」「ピア・サポート活動は楽しくそして優しい気持ちになれる活動です。」などの感想があり、活動を通して相互理解を更に深めることが出来た。

また、ゲーム形式での活動を多く取り入れることにより、打ち解けた雰囲気を作り出し、生徒集団における感情表現の抵抗感を緩和することで、円滑な人間関係の構築を図ることが出来た。



(3) 外部講師による校内研修会

ア ねらい 生徒のコミュニケーション力や自己有用感を高め、

人間関係を円滑に築ける生徒集団を作るため、ピア・サポートを通じた生徒理解の方法や「ほっと」の活用について理解を深める。

イ 対象 全教職員

ウ 内容 ・北海道教育庁学校教育局参事 生徒指導・学校安全グループ主査 岡本浩一氏による、子ども理解支援ツール「ほっと」の見方と分析、有効活用についての研修。

・SC 佐々木啓子氏による、ピア・サポートの理解と演習・手法について研修。

エ 成果 ・「ほっと」「ピア・サポート」について

理解が深まると共に、生徒のコミュニケーション能力の向上を図る有効活用の手立てを知ることが出来た。

・今後、生徒にどう意図的な関わりや対応をしていくかという課題がみえた。



(4) 教育相談週間

ア ねらい ・生徒の面談を通し早期の実態把握を行う。

・生徒が悩みを気軽に話し、ストレス等を和らげ、心のゆとりを持てるような環境をつくる。

イ 対象 全学年

ウ 内容 第1期・・・担任と副担任が中心となり学年付も協力して全生徒を面談

第2期・・・学年の枠を超え、生徒が先生を指名する形態で必ず全員が面談

第3期・・・学年の枠を超え、生徒が先生を指名する形態で面談（希望制）

「ほっと」「Q-U」検査結果を活用。

エ 成果 ・全生徒を面談することで生徒理解が深まった。

・「ほっと」や「Q-U」を事前に実施することで、生徒の背景や現状、コミュニケーションの傾向や課題等を把握しそれを基に面談を進めることができた。

5 次年度に向けて

(1) 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

- ・本事業を推進することにより、中途退学者数が減少した。
H26年度：8人 H27年度：2名

イ その他の指標による評価

- ・ボランティア活動の参加者が昨年度より上昇した。地域の方から感謝され、生徒は充実感や達成感を得ることが出来た。
- ・保健室利用統計より保健室を利用する生徒が上昇したが、これは相談や自己開示する援助要請力が上昇したためと捉える。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

- ・13要素のうち「礼儀」「遵守」の項目がほかの項目と比較し高く、「表明」「緊張」「拒否」の項目が低い。年度当初は緊張しながら、周囲に気を使い、自分の居場所を求めて、周囲に気使いながら自分の意見をなかなか主張できない傾向にあったが、経時比較していくと、全体を通してどの要素・因子も向上している。様々な活動や人とのかかわりを通して徐々にではあるが、社会的コミュニケーションスキルが身につけていることが伺える。ただ、学年・クラスによっては、まだ「表明」や「拒否」の偏差値が低いところもあるので、今後ピア・サポート活動やボランティア活動等を通じて、自分をうまく表現できる力を身につけさせたいと考える。

エ 生徒の変容した姿

- ・ピア・サポートトレーニング実施によって、生徒の良好な人間関係の構築が図れた。集団の中で自分の意見を言うことが苦手な生徒も、トレーニングを通じて表明・発表の力がつき自己肯定感向上にもつながり、友人の中でコミュニケーションを上手にとれるようになっていく。また、授業の中でも、グループワークやプレゼンテーションを通して友達と意見交換したり発表することに慣れてきた様子が見えた。
- ・地域連携や異校種と連携した行事やボランティア活動において、身につけたコミュニケーションスキルを活かし、他者と積極的に関わる生徒が見られるようになった。

(2) 課題

- ・「ほっと」の結果について教員間で共有する体制が必要である。分析結果から具体的な取り組みを意図的に取り入れることによって生徒がどう変容したかを更に分析を深める必要がある。教科・科目・コミュニケーションスキルトレーニングの取組との連携を十分に図る必要がある。
- ・ピア・サポート活動を継続・発展的な取り組みにしていくために計画する必要がある。
- ・スクールカウンセラー人材確保や日程調整が非常に難しく又来校日数に制限があり上手く活用しきれなかった。

(3) 次年度に向けて

- ・「ほっと」を通して生徒のコミュニケーションスキルの把握と、小中高を見通したスキルアップの流れを作る。
- ・異校種間連携事業について、小学校への高校生による出前授業や特別支援学校との交流に参加している生徒等を「ほっと」を用いることでコミュニケーション能力の内容や発達の状況を把握・結果を共有し、課題のある生徒への意図的な働きかけを系統的に行う。
- ・ピア・サポート活動の更なる充実を図る。
- ・人間関係が上手く構築出来ず不登校や別室登校をする生徒が一定数いることから、一層の生徒理解と教職員間による情報共有が必要である。そのためにスクールカウンセラーや外部講師の支援による効果が非常に大きく、次年度以降もスクールカウンセラーの派遣を強く希望する。本事業が決定した際には早い段階でスクールカウンセラーの人材を確保する。